
時の黎明

都筑遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の黎明

【Nコード】

N6628Z

【作者名】

都筑遥

【あらすじ】

透子は幼い時からずっと同じ夢を見ていた。

自分を求める異形の青年。問われる度に過る『名前』への警告。しかしいつもと同じだったはずの夢は唐突に変化を告げる。

自分を見詰める漆黒の中の金の眼が、壊れる夢の中で囁いた。

——見つけた——と。

プロローグ

(……ここは、どこなんだろう)

長く続く無人の廊下。空気はひんやりと冷たく重々しい。

周りに光源は無く色はすべて黒と灰色。本来の色彩はまったく判らない。

廊下の脇に備えられた窓はガラス製。枠のデザインは、植物の蔓が何かモチーフだろうか。そこから見えるはずの外の景色は、今は黒く塗り潰されている。

(無機質で、綺麗)

目に見える場所だけでなく、人気はまったく感じられない。まるで用意されたセットの様だ。

西洋の城を思わせるその造りが、二十一世紀の日本を生きる彼女にはよりその印象を強めている。

まったく無人の、闇に閉ざされた城の廊下で、彼女は一人闇の世界に取り残されていた。

本来ならば怖れてしかるべきその状況で、彼女は引き返すことも考えず、迷わず足を前に進めていく。

何故なら、彼女はこれが夢である事を知っていたからだ。

幼い頃から何度も、何度も同じ夢を見た。

暫らく進むと、目の前に重たそうな大きな扉が現れる。その扉に手を着き、押し開く。金属特有のひやりとした感覚が掌を通して伝わった。

他の夢とは違い、この夢だけは温度が感じられるのだ。

開いた扉の先を、更に彼女は進んでいく。

磨きぬかれた石の床。上質な造りで仕上げられたその部屋は、王の間か謁見の間か、そんな印象だ。奥に設えられた玉座から、ゆらりと人影が動いて立ち上がる。歩み寄る彼女に伸ばされる手。

近付くにつれ色がはつきりと見て取れる。輝くライトブルーの髪が周囲の間を弾くように煌いた。

白い肌に翡翠の瞳が良く映える。胸には豊かなふくらみがあるが、体付きは柔らかさを感じられない。

鍛えられ筋肉の付いた女性の体、というわけでは無い。女性形と男性形が絶妙なバランスを持って混在している、そんな印象だった。

「……貴方は、誰……？」

「俺はリピリス・リア・クロート。俺は何度も君に名乗ってる」
(うん、知ってる)

だけど、知りたいのは名前ではない。

「君は？」

「私は……」

『みだりに名前を口にしてはいけないよ』

心の中で、幼い頃に何度も刷り込まれた警告が彼女の言葉を切らせた。

そして、彼女はいつもの言葉を口にする。

「木城、透子……」

「その名前じゃない」

『名前は、本質を現すものだから』

「透子。時間がないんだ。どうか……」

「え……？」

徐々にリピリスの声が遠のいていく。周囲の景色もぼやける様にして崩れていく。

（起きるんだ。私）

目覚めの予兆。何度も、何度も繰り返して見た夢の終わり。

「透子！」

「！」

もう周りの景色は崩れて形を成していない。リピリス自身の姿も最早見えない。

それなのに、透子の耳には呼びかけるリピリスの声が強く響く。

必死で呼びかける、助けを求める声。

見えないのが判っていて、それでも透子は声に惹きつきけられ振り向いた。だがそこにあったのは見慣れたライトブルーの輝きではなく曖昧な闇よりも深い黒。

白く崩れる虚構の世界から、まるで独立しながらそこに存在^{ある}ように、純粹な漆黒が人の形を取って透子を見ていた。

冗談のように黒一色で作られた影の中で、一つだけ異彩を放つ金の眼で。

―見つけた。

紡がれた言葉は低く小さく、透子の耳には聞き取れない。

ただ聞き取れたならば、それがまぎれもない喜びに震えた言葉だと判ったはずだ。

透子が夢から離れるのを見届けると、黒い人影は用は済んだとばかりに姿を消す。夢が存在していた虚構の空間は、全ての意識が途絶えると同時に消え失せた。

(……)

眼を開けるとそこは自分の部屋で、朝だった。カーテン越しに差し込まれる朝の日差しは柔らかく、徐々に気持ちを落ち着けてくれる。

「……何……？」

幼い頃から何度も繰り返し見てきた夢が、今日はまったく別のもののように感じられた。ただ一つの異物、世界に紛れ込んだ黒の異質物のせいだ。

「……何で……？」

たかが夢。

たかが夢のはずなのに、透子は自分が震えていることに気が付き、乾いた声で小さく呟く。

良くない事の前兆のようだと、体が自分に暗示をかけているようだった。

第一章 神の襲撃

どんな夢を見ても気になることがあっても、基本的に学生である以上は朝が来れば学校へ行く。

無難に都立高校を選び、無事合格をして現在二年三組に在籍する木城透子^{きじゆう}は、いつもと同じ学校への道を歩いていた。

普段は慣れ過ぎてもう面白みも何もない道のりだが、今はその『いつもと同じ』がとれもありがたい気がする。

(……別に……夢のお告げとか、信じる訳じゃないんだけどさ)

背の中程まで長く伸ばしたクセの無い黒髪が、歩く動きにあわせて肩に掛かる。それを払い除けて透子は軽く息を付いた。

別に特別に夢を信じていなかったって、子供の頃から何度も何度も同じ夢を見ていれば、流石に気になる。何よりも、目覚めても全く薄れない登場人物の顔と声が、その夢を透子にとって特別にしていた。

(リピリス・リア・クロート……)

名前も顔も覚えてる。必死に助けを求める声も。

リピリスは他の誰でもない、透子に助けを求めている。

(……どうして……?)

判らない。たかが夢だと切り捨てて気にしなければいいのに、それが出来ないのはリピリスの紡ぐ言葉のせいだろうか。

『その名前じゃない』と、リピリスはいつも首を振る。それに心当たりがあるからこそ、透子の心に引っ掛かってしまうのだろうか。

役所に登録されている名前は確かに『木城透子』に間違いはない。しかしいつだったか、祖母から聞かされた事があったのだ。

透子の名前は『木城』ではなく『紀上』と書くらしい。

始まりに記された者、との意味があるのだと、そう言われた。

何故木城と書くのかと尋ねた透子に、祖母は悲しそうな顔をして、怯えるようにそつと透子に耳打ちした。神に嫌われた名前だから、と。

どういう意味かとは、祖母は最後まで透子に教えなかった。ただ繰り返し人にみだりに名乗ってはいけないと透子に言い聞かせてきたのだ。

祖母から聞くのを諦めた透子が両親に聞くと、母が苦笑してそんな事あるわけ無いでしょと否定されてしまった。父の方も似たり寄ったりだ。

結局聞き出せないうちに祖母は天寿を全うしてしまって、それきり答えを聞ける人間はいなくなってしまった。

(……)

子供の頃から見ていた夢を、最近とみに気にするようになったのは勿論理由がある。前に比べてしょっちゅう夢を見るようになったのだ。まして今日は、いつもと違うものが混ざっていた。

(もしかして、時間がないから……とか?)

焦ったような、必死に掛けられるリピリスの声に何となくそんなことを思いつく。

助けを求められていたのは変わらないが、子供の頃に見ていた時は、あんなに切羽詰った様子は無かった。だがすぐにまさかねと思い直

す。

たかが夢だ。

冷静な部分では否定しているのに、所詮夢だと思いながらも完璧に切り捨ててしまう事が出来ずにいた。

それでも夢に囚われている自分がおかしくて、透子は軽く頭を振って考えを振り払おうとする。

お世辞にも成功したとはいえなかったが、学校に近付くにつれ透子の意識は夢から遠ざかっていった。

「……？」

それは、学校の朝の風景に溶け込まないものを見つけてしまったからだ。

背の高い男性の姿。若いが、高校に用があるような年齢ではない。二十歳は確実に超えているだろう。

服装そのものは風景に違和感がなかったが、彼には似合っていない様に見えた。着慣れていない、そんな感じた。そもそも学生でも教員でもない人間がこの場に留まっている事事態が不自然だろう。

そんな人間が校門脇の壁に寄りかかって、誰かを待っているかの様に周囲へ視線を巡らせている。

透子の目から見て、彼は明らかに異質な存在だったが、不審である点はいくらでも挙げられても、何が異質かと問われれば答えられなかっただろう。

どこからどう見ても彼は普通の人間なのだから。

——そのまま気が付かなければ良かったのかもしれない。
だが、透子は気が付いてしまった。

誰も彼の事を……はつきり言っしまえば、『不審な男』を不思議に思わないらしいという事。そしてもしかすれば、彼の存在そのものを認識していないのではないかという事実。まるでそこに居るのが当然、もしくは見えてもいないかの様に素通りしていくその様を。

恐怖に近い感覚で不審に思いながらも校門へと近付いていくと、彼が整った容姿の持ち主である事に気が付いた。

女性でも中々いないだろうと思われる細く艶やかな黒髪。首の後ろで古風な組紐で纏められていて、腰の辺りまで伸ばされている。手入れが行き届いており毛先まで綺麗だった。どこか肉食獣を思わせる、精悍なきつい顔立ちで、瞳は似合いの金色だ。

（……金の眼ッ！？ 嘘！？）

スルーしそうになって透子はぎょつとして足を止め、思わず彼の方を振り向いた。間違いない。金の眼だ。

「……」

（え……っ）

透子の視線が彼の瞳で止まった瞬間、不機嫌そうだった彼の顔にひどく楽しそうな表情が浮かんだ。良

いものではない。長い間待ち望んでいた獲物を捕らえた肉食獣の様な、寧猛な笑み。

コッ……

長い足を優雅に動かし、彼は透子へと近付いてきた。

（やつ……）

知らずのうちに透子の足は後ずさり、少しでも男から離れようとする。理由は判らない。だが確実に、この男は透子にとって良くないものだ。

（怖い……っ！）

本能に近しい恐怖感が透子の全身を支配する。嫌な汗が背中を伝い、細かく体が震え出す。その透子の恐怖を感じたのか、男の笑みが深くなる。

（い、や……っ）

「木城」

「あ……っ」

恐怖は唐突に終わりを告げた。耳に慣れた優しい声が場の空気をやんわりと変革させていく。

「鈴宮……」
すすみや

「はよ。そろそろ行かないと遅刻だぞ？」

クラスメイトである鈴宮一摩^{かずま}の姿に、緊張で強張っていた体がほつと緩んだ。

一摩は男にしては華奢な部類に入る。顔立ちも整っていて綺麗だ。そう、鈴宮一摩は『美形』ではなく『綺麗』だという形容詞になっ
てしまう。性別は確かに男なのだが、その纏う空気は中性的。

顔以上に、一摩は特別に空気が綺麗だ。それは温厚な人柄のせいだと透子は思っている。

「……」

踏み出していた足を止め、男は微かに眉間にしわを刻み、しかし何をするでもなく、そのままくると身を翻した。

「木城？」

まるで彼の存在などないかのような一摩の振る舞いに、透子は慌てて首を振る。

彼の存在は知覚してはいけないものだ、何となくそう思ったのだ。そんなものを知覚してしまっている事を目の前の少年に知られたいなかった。

「あ、ううん。なんでもない。……じゃあちよつと部室寄ってくから、お先に」

ぱたぱたと手を振り、透子は一摩から離れて部室へ向かう。

別に本当に用があるわけではない。一摩は綺麗で、優しい。存在そのものが人を惹きつける空気を持っているといい。カリスマとでもいふべきだろうか。

そういう人間であるため、本気を含めたファンが多い。街を歩けば普通に芸能事務所から声が掛かる人種でもある。……ので、一緒に居るのは怖い。女の子が。

透子自身も一摩に仄かな憧れを抱く一人だが、それ以上には考えないようにしている。

（鈴宮に本気になったら終わりだって……苦しすぎ）

取り敢えず自分の所属する手芸部の部室まで来て、透子はふうと肩から力を抜く。今いる学校の中は変わらない日常。いつもと同じ、穏やかな日。

（……あの眼……本物だよね……？）

ニセモノっぽさのない眼だった。本物の金の瞳。思い浮かべるだけで日常を壊されそうな強い瞳だった。

（猫の……ううん、アレは猫じゃない。もっと大きい、虎とかの……）

思い出すと、背筋が冷たくなってきた。思わず透子は自分の腕で自分を抱える。

「……誰……？」

気にしなければいいのに、どうしても気に掛かる。

——とても、怖い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6628z/>

時の黎明

2011年12月26日03時47分発行